

口永良部島の火山活動解説資料(平成29年7月)

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

火山性地震は、少ない状態で経過しており、火山ガス(二酸化硫黄)の放出量¹⁾は、1日あたり100~400トンで経過しています。

現地調査では、噴煙及び熱異常域の状況に特段の変化は認められませんでした。

火山ガス(二酸化硫黄)の放出量が2014年8月の噴火前(1日あたり概ね100トン以下)よりもやや多い状態で経過しています。このため、2015年5月29日と同程度の噴火が発生する可能性は低くなっているものの、引き続き噴火の可能性がります。

新岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石²⁾及び火砕流³⁾に警戒してください。向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石²⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。降雨時には土石流の可能性があるので注意してください。

平成28年6月14日18時00分に火口周辺警報(噴火警戒レベル3、入山規制)を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

活動概況

- ・噴煙など表面現象の状況(図1~6、図7-、図8-)

白色の噴煙が最高で火口縁上700m(6月:800m)まで上がりました。

6日、25日及び26日に山麓から実施した現地調査では、これまでの観測と同様に新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近から白色の噴煙が上がっており、火口周辺の地形や噴気等の状況に変化は認められませんでした。また、赤外線映像装置⁴⁾による観測では、新岳火口の西側割れ目付近の熱異常域の温度は低下した状態が続いており、特段の変化は認められませんでした。

24日に古岳山頂付近から実施した新岳の現地調査では、火口から白色の噴煙が勢い良く上がっているのを確認しました。火口外壁南側及び火口西側の割れ目付近で熱異常域を確認しました。また、古岳の現地調査では、火口底の縁辺部で熱異常域と弱い噴気を確認しました。いずれの調査でも前回観測(6月15日)と比べて、火口周辺の地形や噴気等の状況及び熱異常域の分布に特段の変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ(<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>)や気象庁ホームページ(<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>)でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料(平成29年8月分)は平成29年9月8日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』『基盤地図情報』『基盤地図情報(数値標高モデル)』を使用しています(承認番号:平26情使、第578号)。

・地震や微動の発生状況（図 7 - 、図 8 - 、図 9）

火山性地震の月回数は 44 回（6 月：58 回）と少ない状況で経過しました。このうち震源が求められた火山性地震は 11 個で、主に新岳火口付近の海拔下 0 km 付近に分布しました。

火山性微動は 2016 年 9 月以降、観測されていません。

・火山ガスの状況（図 7 - 、図 8 - ）

期間中に東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は 1 日あたり 100～400 トン（6 月：40～400 トン）と 2014 年 8 月の噴火前（1 日あたり概ね 100 トン以下）よりもやや多い状態で経過しています。2017 年 4 月以降は、1 日あたり 400 トン以上が時々観測されるなど、わずかに増加しています。

・地殻変動の状況（図 10、図 11）

GNSS⁵⁾ 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。

- 1) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた二酸化硫黄、硫化水素や水蒸気など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマの蓄積の増加や浅部への上昇等でその放出量が増加します。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用しています。
- 2) 噴石については、その大きさによる風の影響の程度の違いによって到達範囲が大きく異なります。本文中「大きな噴石」とは「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とはそれより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことです。
- 3) 火砕流とは、火山灰や岩塊、火山ガスや空気が一体となって急速に山体を流下する現象です。火砕流の速度は時速数十 km から時速百 km 以上、温度は数百 °C にも達することがあります。
- 4) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 5) GNSS（Global Navigation Satellite Systems）とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。



図 1 口永良部島 噴煙の状況（7 月 28 日、本村西監視カメラによる）
< 7 月の状況 >

白色の噴煙が最高で火口縁上 700m まで上がりました。

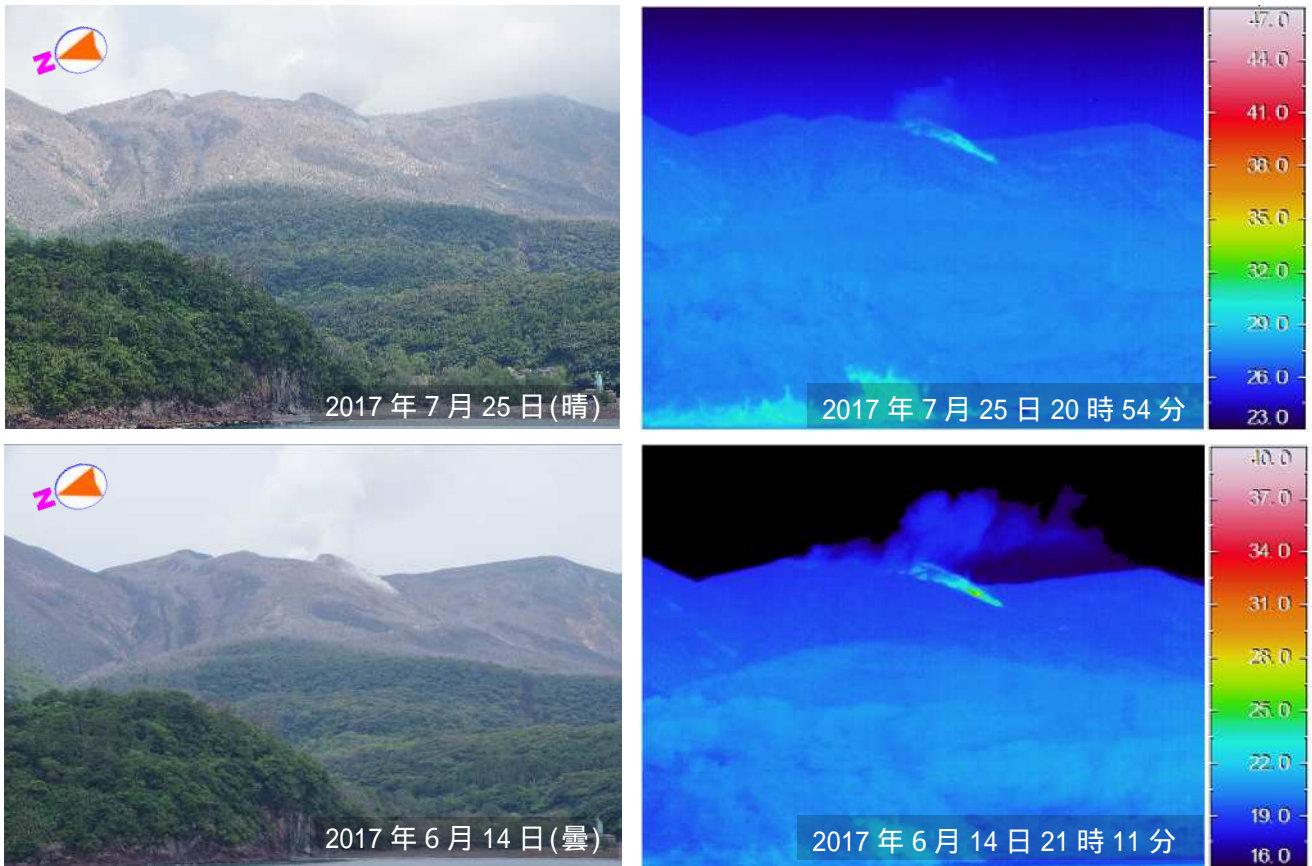


図 2 口永良部島 本村から撮影した可視画像と地表面温度分布
前月(6月14日)と比較して、噴気及び熱異常域に特段の変化は認められませんでした。

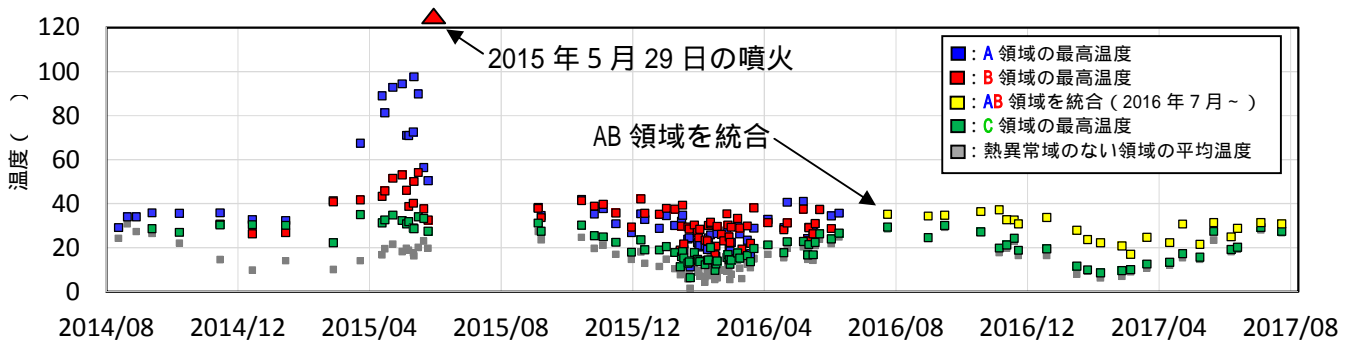
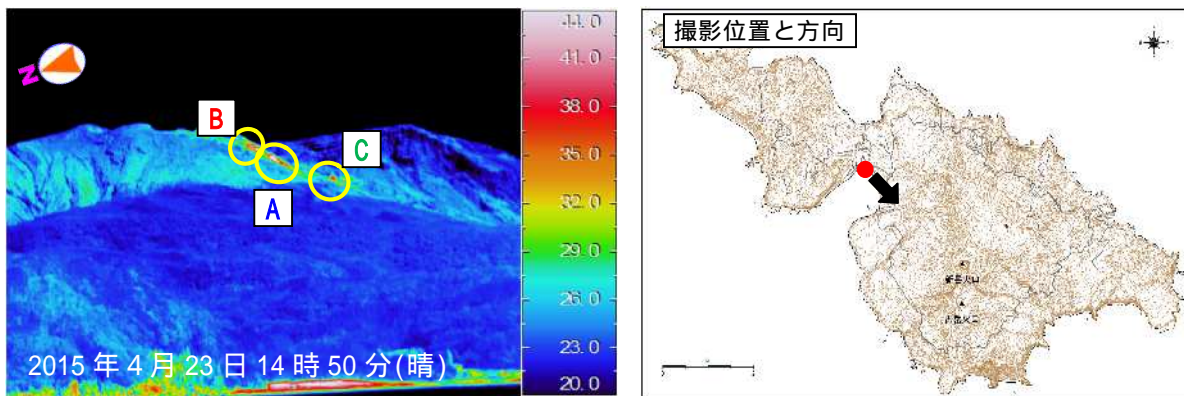


図 3 口永良部島 新岳西斜面の熱異常域の温度時系列(2014年8月~2017年7月)
<7月の状況>

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口の西側割れ目付近の熱異常域の温度は低下した状態が続いており特段の変化は認められませんでした。

A領域は2015年5月29日の噴火前に最も温度上昇がみられた領域ですが、最近の観測ではB領域とほぼ同じ温度で境界も不明瞭なため、2016年7月の観測より一つの領域としてグラフに表示しました。

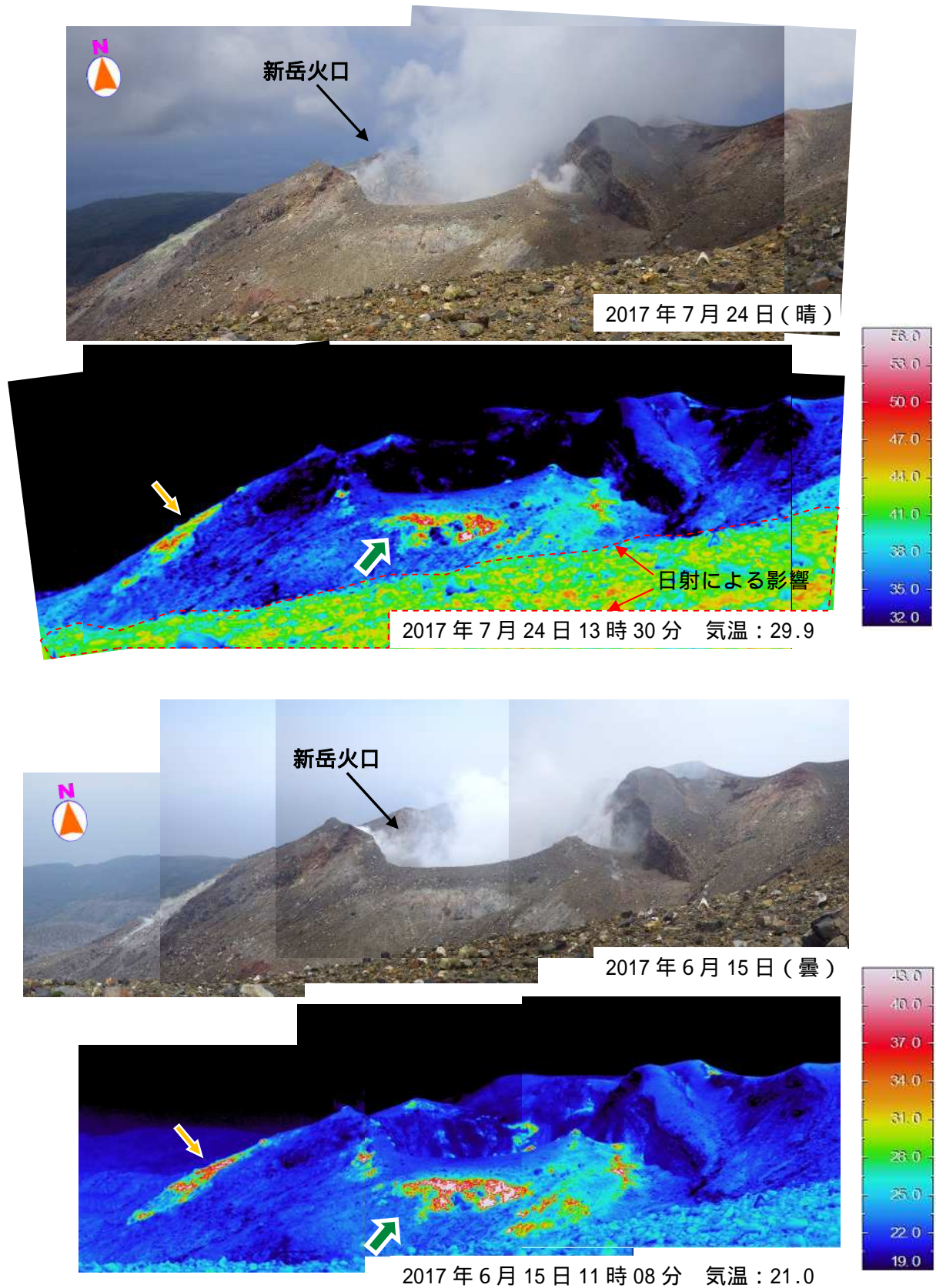


図4 口永良部島 新岳火口南西側の可視画像および赤外熱映像装置による地表面温度分布

- ・24日に古岳山頂付近から実施した新岳の現地調査では、火口から白色の噴煙が勢い良く上がっているのを確認し、火口外壁南側(図中の緑矢印)及び火口西側の割れ目(図中の橙矢印)付近で熱異常域を確認しました。
- ・前回観測(2017年6月15日)と比べて、火口周辺の地形や噴気等の状況及び熱異常域の分布に特段の変化は認められませんでした。

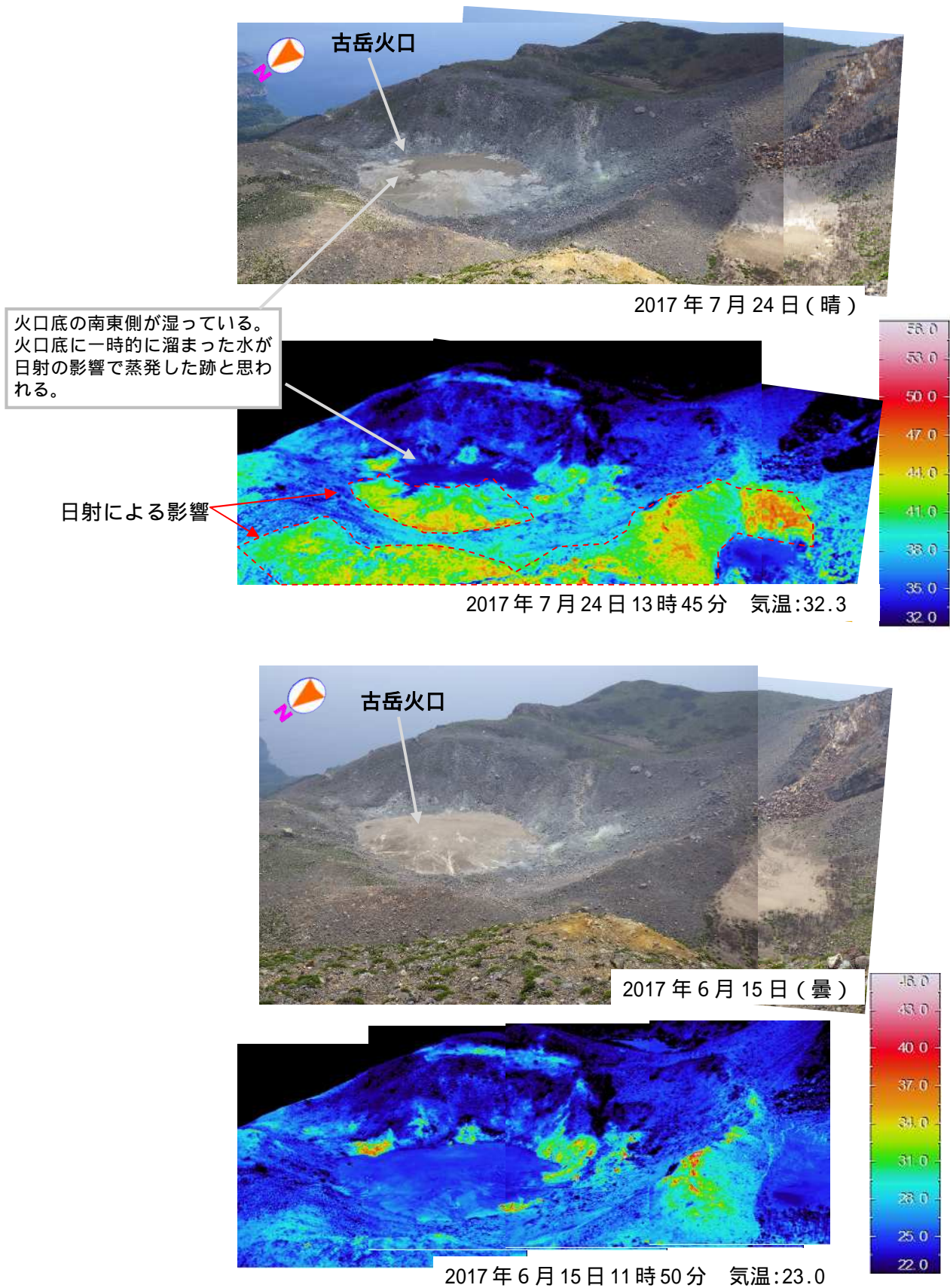


図5 口永良部島 古岳火口の可視画像および赤外熱映像装置による地表面温度分布

- ・24日に古岳山頂付近から実施した古岳の現地調査では、火口底の縁辺部で熱異常域と弱い噴気を確認しました。
- ・今回の観測では、火口底の南東側が湿っているのに対し北西側は乾燥しており、両者で日射の影響によると思われる地表面温度の違いがみられました。前回観測(2017年6月15日)と比べると、火口周辺の地形や噴気等の状況及び火口底縁辺部の熱異常域の分布には特段の変化は認められません。

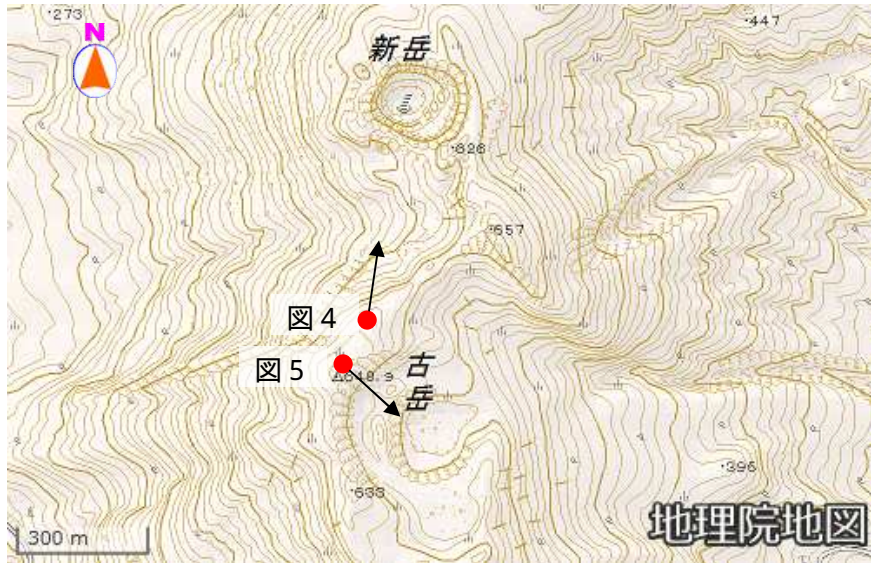


図6 口永良部島 図4、5の観測点位置図

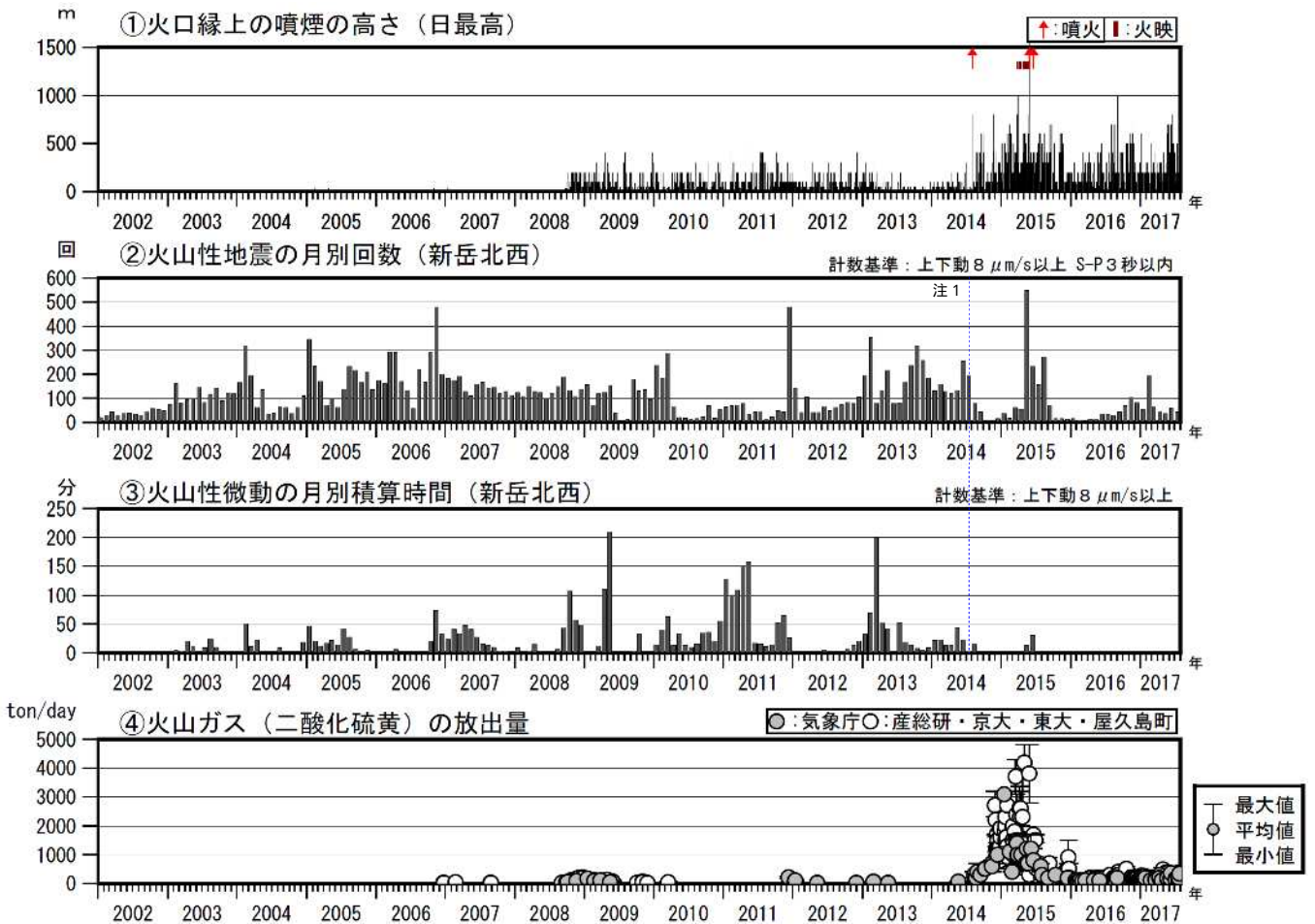


図7 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2017年7月）

注1 2014年8月3日の噴火から2016年5月31日までは噴火により火口周辺の観測点が障害となったため検知力が低下していました。この期間は新岳火口から約2.3kmにある新岳北東山麓観測点（上下動 $1\mu\text{m/s}$ 以上）で、また2015年5月23日から発生した新岳の西側の地震活動に対応するため2015年5月1日から新岳西山麓観測点（上下動 $3\mu\text{m/s}$ 以上）を加えて、いずれかで基準を満たす地震を計数していました。

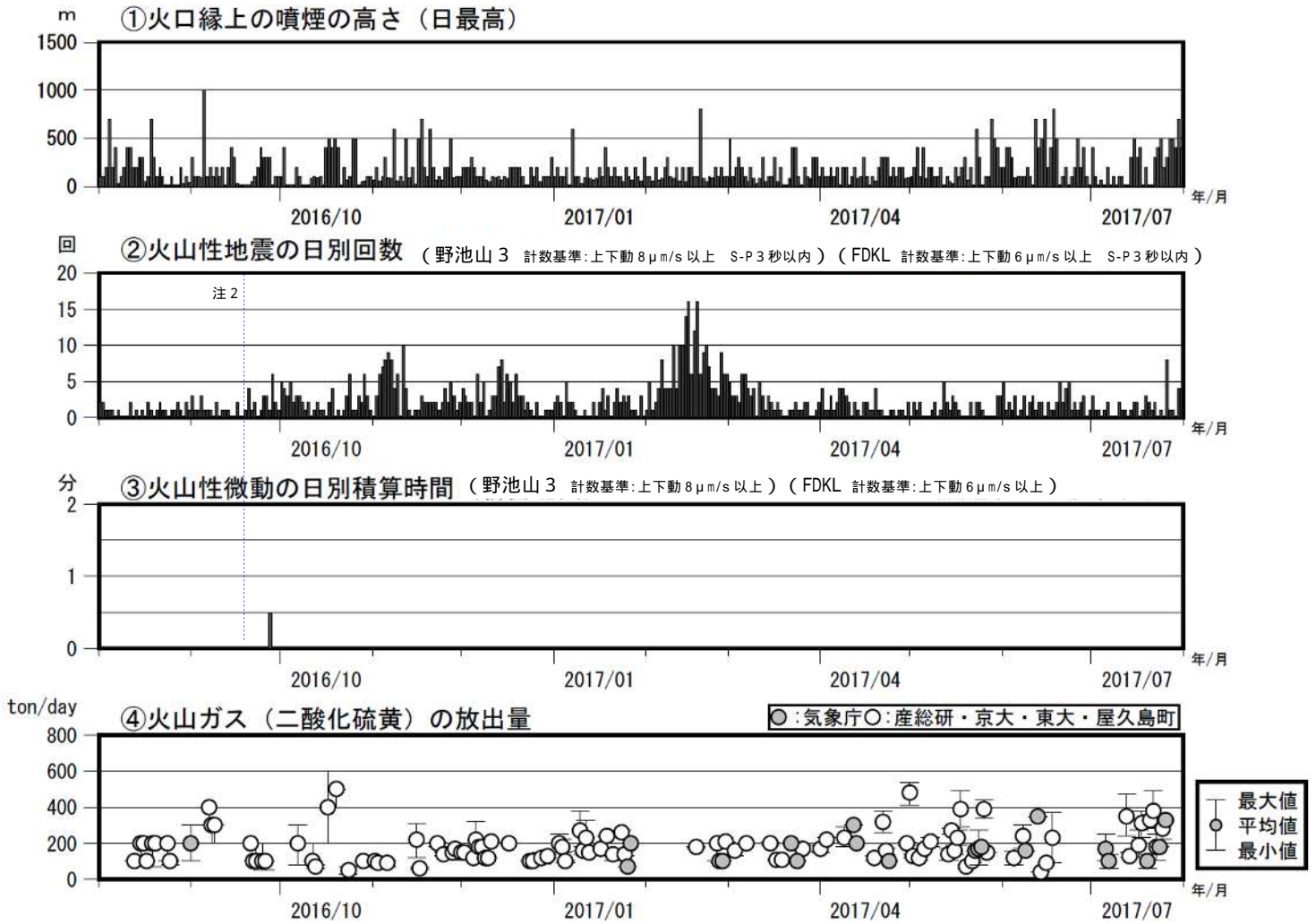


図8 口永良部島 最近の火山活動経過図(2016年8月~2017年7月)

< 7月の状況 >

- ・白色の噴煙が最高で火口縁上700mまで上がりました(6月:800m)。
- ・火山性地震の月回数は44回と少ない状態で経過しました(6月:58回)。
- ・火山性微動は2016年9月以降、観測されていません。
- ・火山ガス(二酸化硫黄)の放出量は1日あたり100~400トン(6月:40~400トン)で経過しました。2017年4月以降は、1日あたり400トン以上が時々観測されるなど、わずかに増加しています。

注2 2016年9月18日から11月22日までは野池山3観測点が機器障害により欠測中のため、FDKL観測点(上下動 $6\mu\text{m/s}$ 以上)を代替基準点とし地震を計測しています。

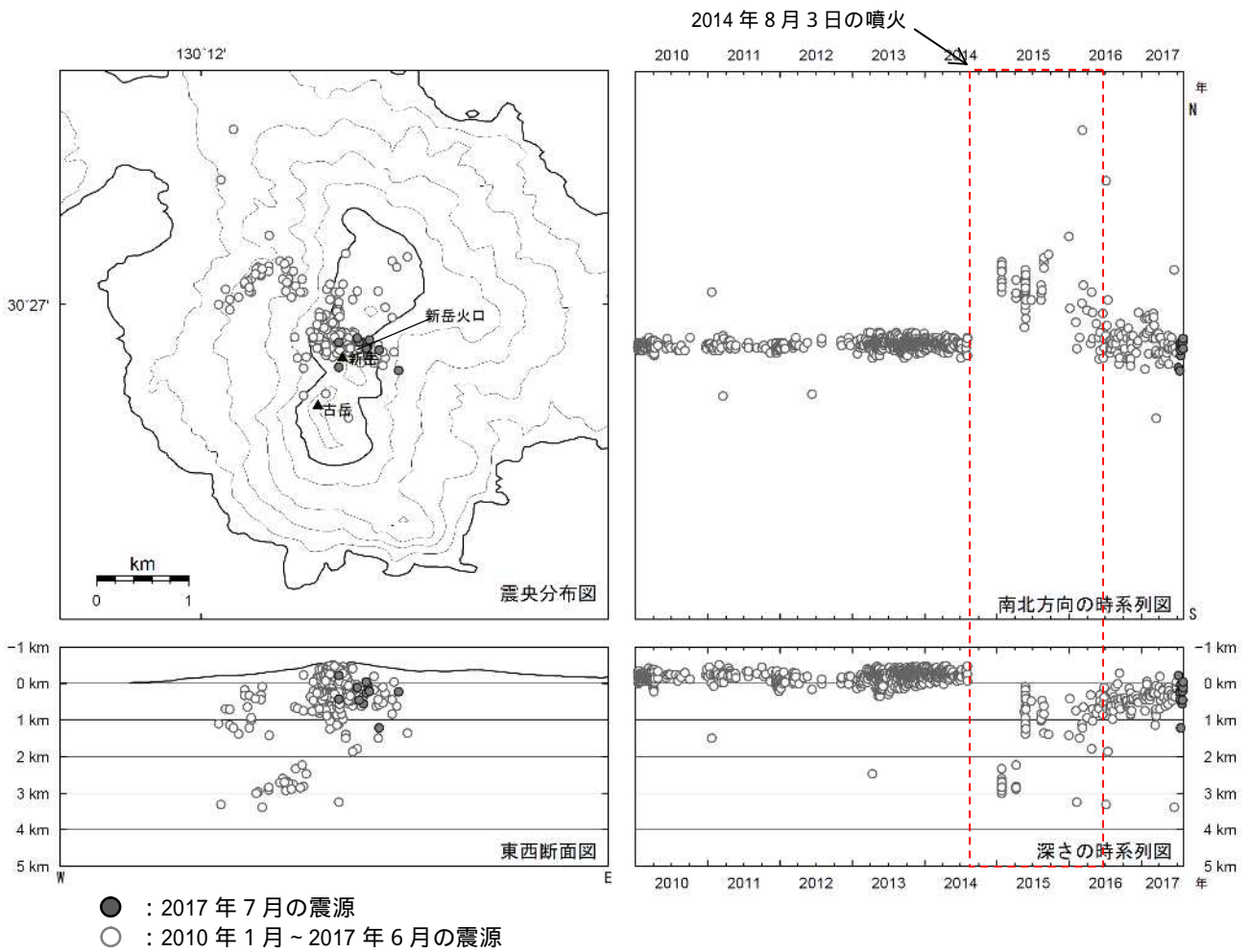


図9 口永良部島 震源分布図（2010年1月～2017年7月）

< 7月の状況 >

震源は、主に新岳火口付近の海拔0 km 付近に分布しました。

2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、噴火以降から2016年5月31日まで（図中赤破線枠）は検知力や震源の精度が低下しています。

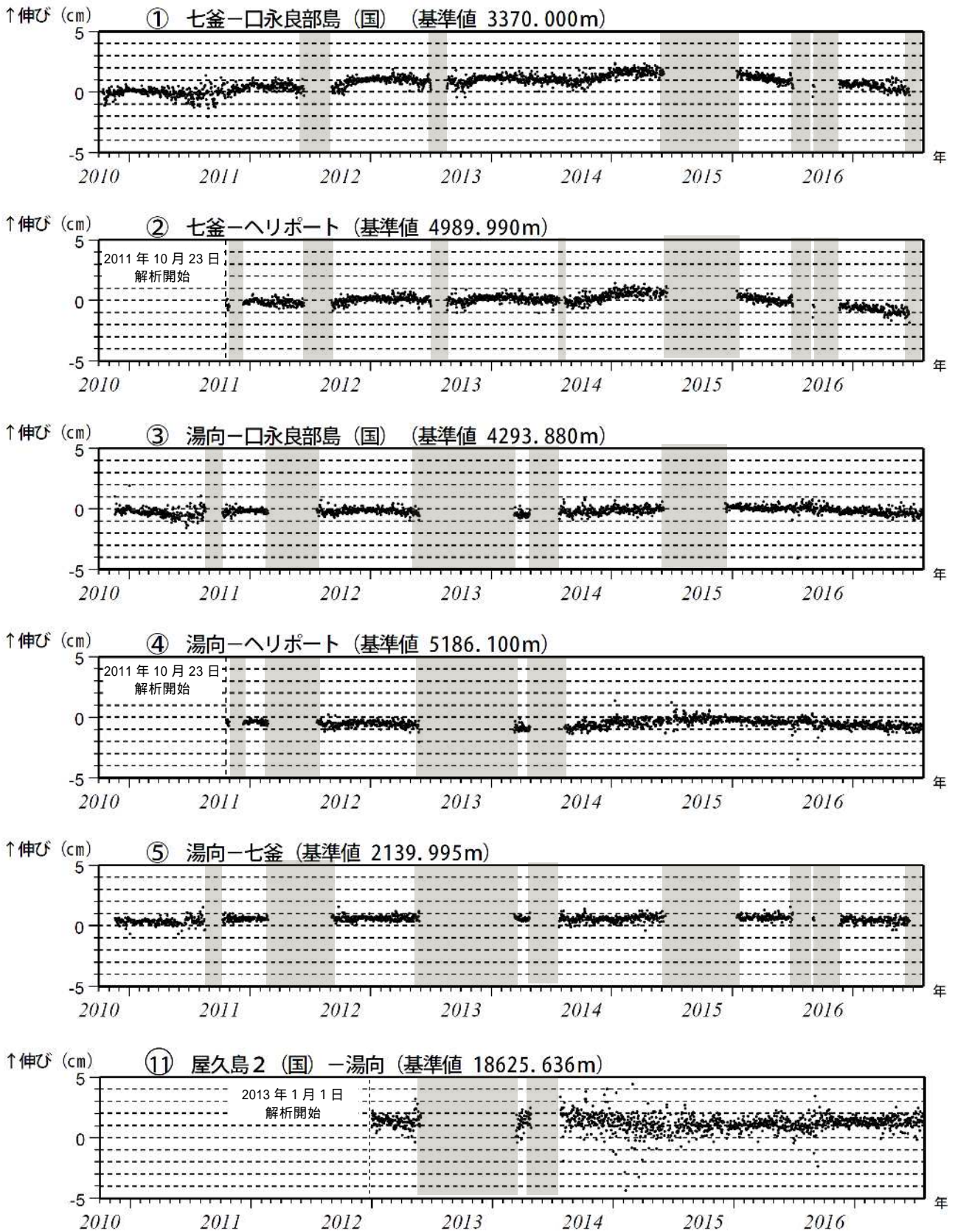


図 10 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010 年 10 月 ~ 2017 年 7 月)

GNSS 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした

これらの基線は図 11 の ~、~ に対応しています。

灰色部分は観測点障害のため欠測を表しています。

(国): 国土地理院

